

もっと知りたい

武者小路実篤

あたらしむら 新しき村

100年のあゆみ

■村での仕事

実篤たちが手に入れた土地は、わずかに畑があるほかは、手付かずの林と野原が広がっているだけ。最初に村にやって来た18人は、麦や野菜など食料の栽培^{さいばい}だけでなく、これから暮らす家も自分たちで建てる^たところから始めました。

耕運機^{こううんき}もトラクターも無い時代。馬を使って土を掘り起こし、村の人たちが手で鋤^{くわ}を振るって田畑^{たがや}を耕^かします。



大正8(1919)年、麦を刈る実篤(真ん中)



実際に使われていた水カタービン

電気はもちろん通じていません。村に電灯をつけるため、自分たちで水路^{すいろ}を掘って、小型の発電機^{はつでんき}(タービン)を買^かい、水力発電^{すいりくはつでん}を行いました。

そして村を始めて10年以上たった昭和5、6年頃、村に電気がつきました。

当時、この辺りで電気が使えるという^{かつきてき}ことは、とても画期的な^{かくてき}ことでした。



活動に必要なお金のほとんどは、実篤の作家としての収入^{しゅうにゅう}から使^{つか}われました。

その他は応援する人たちや、実篤の友人の作家や画家たちからの寄付^{きふ}でした。村の産物^{さんぶつ}を売^うった収入で生活できるようになるまでには40年もかかりました。

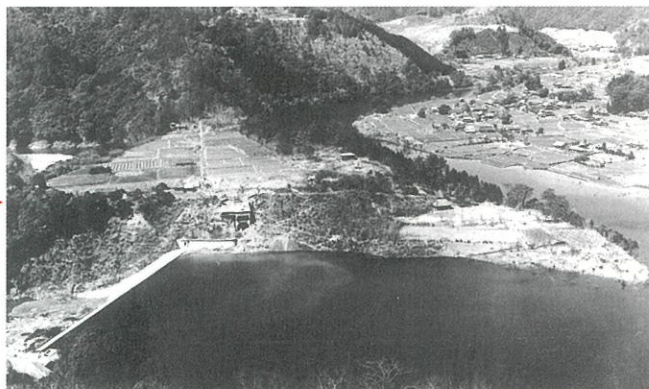
■村が沈む!?

昭和13(1938)年、日向新しき村の周りを流れる川にダムが建設されて、新しき村の土地の一部が水没することに。

村の人々は数名を残し、もう一つ新しき村を作るため、土地を探しに行きます。



ダム工事前 写真下の方まで田んぼが見える



ダム工事後 手前にダムの水がたまり、土地の形が変わっているのがわかる

■もう一つ新しき村を作ろう!

新しい土地は、東京から日帰りで行ける埼玉県・毛呂山町に作るようになりました。

再び土地を耕すところから始め、さまざまな苦難を乗り越えながら、現在まで続く村を作り上げました。



埼玉の新しき村の田んぼ お米の収穫をしているところ



鶏舎 たくさんの鶏を育てて卵を販売していた

埼玉の新しき村では多い時には60人以上の人が暮らし、村の中には幼稚園も建てられ、養鶏などにより、経済活動は発展して行きました。

現在は村で暮らす人が減り、幼稚園も養鶏もなくなっていませんが、太陽光パネルを設置して電気を売るなど、時代に合った活動が行われています。



現在の村の様子 太陽光パネルで発電した電気を電力会社に売っている